（別紙 2）

審査の結果の要旨

氏名　伊川健二

本論文のタイトルにある「大航海時代」とは、ヨーロッパ史の文脈における 15 世紀末以降の新大陸・アジア進出のみを指すのではなく、それ以前よりアジア内部で機能していた海上交通ネットワークをも含めて再定義されたものであり、「「三国」世界」とは天竺・震旦・本朝からなるが、天竺にシャムと仮名を振る用法の存在が示すように、東南アジアをも含めた空間を指している。こうして設定された時間・空間のなかで、本論文は、明中心の海禁秩序のもとで、諸国国王と明皇帝、あるいは諸国国王間での通交が唯一合法的とされていた 16 世紀前半までの段階から、海禁秩序の外側にヨーロッパ勢力をも含めた新たな通交者があいついであらわれ、海上交通ネットワークを著しく変貌させるに至った 16 世紀なかば以降の段階への移行を、日本・中国・朝鮮・ヨーロッパ諸国に残された多様な史料を駆使して、再構成しようと試みる。

従来の研究では、遣明使や後期倭寇をキーワードとして、海禁秩序の成立と崩壊を、漢文史料を中心に扱う流れと、ヨーロッパの登場によるアジアへのキリスト教伝播や「世界史」への組み入れを、欧文史料を中心に扱う流れとが併存し、両者を統一した歴史像が編み上げきれていなかった。著者は、日本史学専門分野に身を置いて遣明使節や遣明船貿易の研究から出発しつつ、独力で海外調査をくりかえして欧文史料の探索を行い、二つの流れを合わせたアジア史像の構築に果敢に挑戦した。まだ欧文・漢文史料の読解力は十全とはいえないが、その激動と混沌ゆえに研究が遅れがちであった 16 世紀アジア史に、「夷船通交」（海禁秩序に沿った船もそこから外れた船も包含する対中国通交）という観点を導入して、一つの筋を通した点は、大きな成果といえる。

具体的な成果として評価すべき点をいくつか挙げよう。まず、遣明船貿易の基本史料でありながら充分な史料学的検討が行われていなかった「戊子入明記」をとりあげ、その内部構造や現状に至るまでの来歴に説得的な説明を付与し、同記冒頭の二つの文書を遣明船の予算案として位置づけたことである。つぎに、ポルトガル人の日本初来と微妙にからむ 1540 年代のいくつかの遣明船を、一船団に属する三艘の船が別の史料上にばらばらに捉えられたものとして関連づけ、前述の第一段階から第二段階への移行の核心部に位置づけたことである。さらに、明の沿岸島嶼群と日本列島とが、海禁秩序から外れた空間として共通性をもつという示唆に富む指摘を行っているが、この点については、欧文史料を本格的に用いた東南アジア－日本・琉球間交通の再構成とあわせて、今後の研鑽に期待すべき部分が多い。

以上のように、本論文は、多言語史料を駆使しなければ描ききることのできない時代と地域の歴史像を提出することに果敢に挑み、その扉を推し開いた業績である。問題の大きさと困難さから、本格的な成果を出すまでには、なお弛みない研鑽と多大な時間を要するであろうが、著者のこれまでの歩みと本論文の達成は、それを期して待つのに充分なものがある。

以上より、本委員会は、本論文を博士（文学）の学位を授与するにふさわしい優れた業績として認めるものである。